

パ・シルムにおける「わざ」の認知と分類-中国吉林省延辺朝鮮族自治州の朝鮮族-

著者	宇佐美 隆憲
著者別名	USAMI Takanori
雑誌名	アジア・アフリカ文化研究所研究年報
巻	29
ページ	1(150)-16(135)
発行年	1994
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00010115/

パ・シルムにおける「わざ」の認知と分類

—中国吉林省延边朝鮮族自治州の朝鮮族—

宇佐美隆憲

はじめに

民族が固有に伝承してきたスポーツの中には、現在でも独自の形態や体系を持つスポーツが存在している。このようなスポーツを民族スポーツと呼んでいる⁽¹⁾。この民族スポーツは、民族独自の考え方に基づいて形成されていることから、いわゆる近代論理の上に成立する近代スポーツとは明らかに異なるものであると位置づけられている。そのため、民族独自の思考の上に成立するとされる民族スポーツの分析は、当該社会の文化を知るための方法の一つであると考えられてきた。文化人類学の研究の中で、時折、スポーツ現象が取り上げられてきたのもそのためである⁽²⁾。

そして、スポーツ現象の分析にあたっては、これまで文化人類学が示してきた理論モデルが援用されてきた。しかし、その多くは文化人類学的関心からする個別研究の域にとどまっているにすぎず、いわゆる民族スポーツの内部にまで分け入って、そこから文化を考えていくといった態度をとってきたわけではなかった。このような文化人類学者の民族スポーツに対する視点は、スポーツそのものを対象にしてこなかったことを意味している。

しかし、仮に、スポーツ人類学が「スポーツを窓口とする文化研究」であるとするなら、スポーツそのものの分析を通して当該文化を理解するというのも理論的には正当性を持つことになる。さらに、この分析にあたっては、観察者の解釈よりも、これまで認識人類学が示してきたような、文化の担い手達の理解から当該文

化に接近していくことが一つの有効な手段であると考えられる。というのも、実際にそれを演じる者の内なる声が、運動そのものを的確に表現することもあるし、スポーツに対する民族の知識についても触れることができるからである⁽³⁾。

それでは、このように民族内部の知識を問題とした場合には、何に注目したらよいのであろうか。まず考えられる一つには、ルールがある。民族スポーツで採用されているルールは、時として、当該文化の規範に基づいていることがある。したがって、ルールの分析は、当該社会の根底にある規範を考える上でも有効な手段となる⁽⁴⁾。次に、二つめとして運動技術、あるいは「わざ」に対する認識という問題が考えられる。一見すると、運動形態は同じにみえても、ほんの僅かな違いが、実はまったく異なる運動技術と見なされる場合もある。この認識の仕方は、文化を背景とした分類概念であり、当然、民族スポーツの場合には、そのスポーツの運動経験を持っている者のほうが分類も明瞭となる。これは、運動技術の習得の過程において、民族スポーツ文化のコードを身に付けるためのトレーニングが施され、これに沿って認知がおこなわれているからである。わざの習得過程の認知システムについては、日本の武道を対象に生田久美子がすでに優れた論功を提出している⁽⁵⁾。

スポーツの内部からのアプローチとなると、以上のようなことが考えられるが、もう一つ注意しておかなくてはならないことがある。それは、生田の視点との重複部分もあるが、対象となる民族スポーツが、どのように伝承されてい

るのかという問題である。つまり、すでに成文化され一定の基準が提示されている場合には、それが当該文化における認識ということになり、すぐにでもそれを取り出すことは容易となる。しかし、これに対して、成文化が遅れたり、あるいは成文化されていても、現実にはこれと異なる昔ながらの分類が存在する場合もある。この辺りのギャップも知っておく必要が出てくるのである。したがって、運動技術の分類、あるいはルールの認識といったものは、民族スポーツの場合には文献資料にその多くを頼ることができないわけである⁽⁶⁾。

さらに付け加えるなら、運動の種類ということも問題になろう。あまりにも技術が単純すぎるのも問題である。運動技術の分類があまりにも単純になってしまいがちだからである。したがって、ある程度の複雑さを持つスポーツで、なおかつ運動技術に対しての認識が伝承されるようなスポーツが望ましいということになる。

以上のような点を考慮して、本稿では、中国朝鮮族の「パ・シルム」を取り上げることにした。このパ・シルムは後述するように、現在わかっている範囲では、中国朝鮮族の独自の形態として、今日まで継承されている民族スポーツの一つである。そこには、民族独自の認識を見出せる可能性が高いわけである。ここでは、特にシルムの運動技術に注目したい。運動技術そのものは、ある一定範囲内で伝承される性質のものだからである。このように伝承されたシルムの運動技術がどのように分類されるのか、さらに、そこには分類にあたっての認知原理が見出せるのか、といった問題の一端を明らかにすることが本稿の目的である。

最後に本稿で表記される「わざ」と「運動技術」の用語について若干の説明をしておきたい。通常、運動技術と表現した場合には、それは再現可能な動きのことで、だれもが共有できる運動形態のことを指す言葉として用いている。これはテクニックを意味する。これに対して「わざ」といった場合には、そのほとんどが個人だけがなしうることでできる動きであり、スキル

に相当する言葉として使用する。さて、本稿が取り上げる動きの名称は、これまで一定の基準がもたれてきたわけではなかった。たしかに、パ・シルムに関する著書はこれまで十数冊が出版されているが⁽⁷⁾、ここで取り上げられた技術は、明らかに別の種類のシルムの技術なのである⁽⁸⁾。したがって、これをパ・シルムの運動技術とすることには問題があると考えられる。

そこでここでは、一つの動きに対して一定の共通名称が見られる場合には、彼らの共有する文化と位置づけ、これを「運動技術」という名称で表現し、共有されていない名称の場合には、文化レベルでの認識に到達していない動きと見なし、これを「わざ」という言葉で表記することにした。さらに、「わざ」と表記された動きであっても、論証の過程で明らかに共有されていると見なされた時点で、「運動技術」という用語を当てることにする。ただし、この場合においては、必ずしも厳密な使い分けはしていない。

1. 調査対象

1) 中国朝鮮族概観

中国吉林省延辺朝鮮族自治州は、北緯41度から44度、東経127度から131度の間に位置し、総面積は42,700平方キロメートルで吉林省のほぼ4分の1を占める朝鮮族の集中居住地域である。南には、豆満江をはさんでその対岸に北朝鮮を望み、東はロシア連邦とも接している。また、東南にはロシア連邦と北朝鮮に挟まれる形で湾をもっており、その目前には日本海が広がっている⁽⁹⁾。特に、92年後半からこの湾の近隣は急速な発展を始め、現在まさに建築ラッシュの状況にあり、人口も前年度の倍以上に膨れ上がったという。これは、92年8月24日に大韓民国（以下、韓国）との間で国交が結ばれ、韓国側にとっては言語や生活習慣などが基本的に一致していることから経済進出が積極的におこなわれ、また、中国側にとってもこの地を東北地方の経済特区の一拠点にしたいというもくろみがあり、双方の思惑が合致した結果であった。しかし、このような経済的理由以前に、この地の自治権

を行使する民族が同胞であるという同一感から、彼らの進出を容易にしたということであろう。

さて、それではこの地域の民族構成と行政区分を見ておくことにしたい。89年の人口調査をみると自治州全体で朝鮮族の占める割合は39パーセントであるが、自治州の中心地である延吉市になると人口293,069人中、177,547人が朝鮮族であり、60パーセントを占めることになる。特に延吉市、图们市、龙井市、琿春市の4市は朝鮮族の多い地域である。延边朝鮮族自治州はこの4市の他に、和龙、汪清、安图、敦化の4県からなり、自治州の中心地が延吉市となっている。

このような人口比率は、この地域の生活にも反映している。漢族の生活とは異なる朝鮮族独自の生活習慣が存在しているのである。その典型例は、日常的に使用される言語である。日常会話は中国語よりも朝鮮語の使用頻度が相対的に高くなる。また、日常的生活習慣も、漢族とは異なる朝鮮族の伝統がそこには息づいている。しかし、この中には、すでに漢化しているものもあり、例えば、目上の人の前では煙草をすわないようにするという韓国では一般的な儒教精神もここでは、すでに消えうせ、中華思想に基づく、煙草の共有が見られるのである。このように、朝鮮族としての民族文化を維持する一方で、漢化現象の側面も見られるのである。

それでは、この地域のスポーツ文化についても概観しておこう。この地域は古くから「サッカーの里」と呼ばれるほど、サッカーが盛んであったようである。自治州が成立した1953年から57年までの5年間に570余のサッカーチームが組織され、ほとんどの機関、工場、学校、農村の公社(郷)・隊(村)で、サッカーチームと各種のスポーツサークルを持つようになった。また1980年代には、全州に1,380ヶ所のサッカー場の存在が確認されており、そのうち規格にあったサッカー場は377ヶ所に及んでいたのである。このように、延边地区は、とりわけサッカーに力を入れていることが指摘できるのである。

サッカー以外の特徴としては、中国国内ではめずらしく、テニスの普及率が非常に高いという点が上げられる。現在でも、テニスを学校教育に導入したり、あるいは委員会レベルで組織されるテニスチームを編成するといったことは、北京、上海などの大都市を除くと非常に少ないのが実情である。これは、ラケット、ボールといった道具が高価であること、また、指導者の不足などの問題によるものであるといわれている。しかし、延边地区に限っては、少なくともテニスは古い歴史を持っており、特に第二次大戦前から駐留していた日本軍がこの地に持ち込んだのがその始まりだといわれている。

さて、次にこの地域でおこなわれている主たる民族スポーツについても触れておこう。朝鮮族の民族スポーツといえば、シルム(씨름)、ノルティギ(널뛰기)、クネ(그네)、がその代表的なものである。これらの民族スポーツは、現在、運動会の中でおこなわれており、とりわけ1952年9月3日の自治州成立を記念した祝祭「9・3」で、総合的な大運動会が開催されることが多く、この中で民族スポーツは必ず採用されている。

ところで、1988年のソウルオリンピックから採用種目となったテコンドウは、少なくとも延边地区においては88年のオリンピック終了後に伝播しており、民族スポーツとしては、新しいものという価値意識がもたれている。したがって、いわゆる運動会種目として採用される民族スポーツとしてはシルム、クネ、ノルティギということになる。なかでも非常に一般的な種目がシルムである。これは、クネ、ノルティギが、ある程度の技術を最低限必要とするのに対し、シルムは、たしかに技術は存在するが、その技術を身に付けなくても、取り敢えず、試合をすることぐらいはできるような運動種目だからである。したがって、農民運動会などの規模の小さな運動会では、シルムだけが他の種目のように事前に選手登録をせず、当日、その場で参加者を募り、競技に入るとする方法を取るのが普通である。つまり、だれもが参加可能であると

ということなのである。

しかし、大会の規模が大きくなるとクネ、ノルティギのように運動技術を身に付けた者達が試合に参加することになる。

2) 運動形態別シルムの分布

中国朝鮮族がおこなっているシルムは、すくなくとも現在、韓国でおこなわれているシルムとその運動形態は異なっている。これまでの研究によれば⁹⁹、シルムにはいくつかの運動形態の存在が指摘されている。現在わかっている運動形態はサップを左足につけて行う「右シルム(오른씨름)」, 右足にサップをする「左シルム(왼씨름)」, さらに帯を腰にまわし、それを両手でつかんでおこなう「帯シルム(통씨름)」, そして延辺でおこなわれているスタイルである「パ・シルム(叫州互)」¹⁰⁰の4種類があるという。運動形態が異なるということは、当然、運動技術にも違いが見られるということであり、これら運動形態の異なるシルムを一緒に扱うことには問題が出てくる。そこで、調査地でおこなわれているパ・シルムの分布状況を明らかにしておきたい。

これまでの報告によれば、シルムはその種類(運動形態の違い)によって地理的分布に違いが見られるという。一洋薬品シルム研究所[1991:41-43]の指摘によれば、右シルムは咸鏡道、平安道、黄海道、江原道、忠清道、慶尚道にみられ、左シルムは、京畿道、全羅道などに分布しているようである。帯シルムについては地域の限定はなく、今は類似した形態が沖縄に残っているという。この分布について崔常壽[1988:40]や金正禄[1992:27]は、その地を忠清道であると指摘している。最後にパ・シルムについては咸鏡道、平安道、そして中国吉林省延辺朝鮮族自治州でおこなわれていたと報告している。

これらの分布は、何れも近年のものではなく、朝鮮半島では、1927年の「朝鮮シルム協会」が結成される当時の調査が基になっているという。長谷川明[1933:207]の報告にもあるように、左シルムと右シルムの分布については、当時高校の教師であった協会の創設者たちが、夏休み

で故郷に帰る学生達に依頼して地元のシルムの様子を調査させた。そして、この年「朝鮮シルム協会」は、この調査結果を基にして左シルム的方式で初めての全国大会を開催したのである。その後、少なくとも韓国では左シルムに統一されるようになる。朝鮮民主主義人民共和国(以下、北朝鮮)の場合には、どのような経緯の下に統一されたのかについては、明らかではないが、1950年代後半には、すでに左シルムに統一されたようである¹⁰¹。これも朝鮮シルム協会の働きがベースにあったからだと考えられよう。このような動きからも推測できるように、現在、パ・シルムが確認できるのは、中国吉林省延辺朝鮮族自治州の一ヶ所だけということになる。

2. 調査方法とインフォーマント

1) 調査方法

調査に関して少し説明しておきたい。調査地は自治州の中心地である延吉市とその周辺部が対象である。しかし、シルム選手達の合宿などの都合によって延吉市とはほど遠い地域まで足をのばすことも比較的多かった。そのため、本稿の基礎資料は延辺自治州内の延吉市、图们市、龙井市、珲春市において得たものである。調査は、1992年7月上旬から9月中旬までの約2ヶ月と1933年8月から9月中旬までの約1ヶ月半¹⁰²。延べにして約3ヶ月半をあてた。

調査方法としては、シルムと深く関わってきた人物に調査表(資料1)を配布し「わざ」の名称を記述してもらった。そして、別の日にその記述について面接を試みた。また、シルム大会ならびにシルムの練習試合のビデオをみせ、それが何という「わざ」か、その名称の聞き取りをした。なお、ビデオによる「わざ」の分類に関しては、次の機会に分析することにし、今回は、調査表と面接調査による結果を資料とした。ただし、インフォーマント番号の07と10については、実際に演技をおこなってもらい、その時の聞き取りによって作成したデータを用いている。

なお、運動技術の調査ということもあり、そ

(資料1)

您好？ 我叫宇佐美隆究，在日本东洋大学任体育民族学教学。这次到贵国主要是为了了解和学习朝鲜民族传统的摔跤，促进各民族体育事业的发展与交流为其目的，特制定此问卷调查表，望各位先生和朋友们请给予多方协助与指教为盼！

问 卷 调 查 表

您的姓名 () 出生年月日 () 籍贯 () 工作单位 ()
 您所从事过或现所从事的体育专项是 ()
 何时何地开始学过朝鲜族摔跤 ()
 您所学方法是
 1. 通过观看比赛或别人练习后自己研究，训练？
 2. 拜师学习师傅姓名 () 现年龄 ()
 3. 3. 或其它什么方法 ()
 您所主要参加过的朝鲜族摔跤赛的经历：
 () 年 () 月大会，所得名次 ()
 () 年 () 月大会，所得名次 ()
 您认为朝鲜族摔跤的基本技术可分为：
 (请填写在下边空白内)

谢谢的协助与指教！

宇佐美隆究

の技術を調査者自身も認識できることが望ましいと判断し、1992年8月から1ヶ月間、選手と共に合宿に参加し、そこで、パ・シルムの運動技術を習得した。さらに、試合方法を知る必要から実際に試合にも出場した。

2) インフォーマントに関する記載

パ・シルムの基本技術を習得するためには、ある一定の練習を必要とする。そのため、インフォーマントとして一定の情報を持ち合わせている人は、この場合、非常に限定されることになる。そこで、ここで調査対象となった人物は、これまでパ・シルムと深く関係してきた元選手ならびに現選手の合計13名を対象とした。この13名はシルムの「わざ」ならびにその名称を知っている人物ばかりである。いわゆる伝統的なシルムの技術を継承してきた者達だとみなしてよい。たしかに、この13名以外にも伝統的な技術を受け継いだ者は多い。しかし、現在はその所在が不明であったり、すでにこの地を離れていたりしていることから、実際にはそれ程多く

の伝承者を残していないのが現状である。したがって、ここで対象となった13人のインフォーマントは、この地域において、現在、最もパ・シルムについて造詣が深い人々ということになる。

ただ、このインフォーマントたちは、全員がシルムだけを継続的にこなってきたわけではない。他のスポーツも続けておりシルムよりも別のスポーツの方が経験としては長い者もいるのである。このような状況は、シルムの技術にも何等かの形で影響を与えるようである。

そこで、インフォーマントの経歴ならびに運動経験について触れることにする。ここでは、1993年の調査表ならびに面接調査で得た知見を記述する。なお、インフォーマントの記述は出生順としている。

例：

<00>：インフォーマント番号

a：生れた年

b：運動経験（専門）

c：シルムを始めた年

d：個人情報

<01>

a：1930年

b：シルム

c：1942年頃

d：12歳の時に村落内でおこなわれたシルム大会に出場し準優勝となる。戦後も何度か試合に出場し、57年の延吉市の大会では優勝している。59年には延吉市のシルム選手のコーチとなり、後進の指導にもあたるが、文化大革命の前後から、シルムとの特別な関りは持たなくなった。

<02>

a：1935年生れ

b：シルム

c：1950年頃

d：15歳頃からシルムをはじめる。村落内の大会では常に良い成績を修めていたという。また、市レベルの大会では何度か入賞もはたしている。現在はシルム大会の審判を勤めることもある。

<03>

a：1935年生れ

b : レスリング

c : 小学校時代 (1945年頃)

d : シルムよりもレスリングの選手として有名。シルムはレスリングの練習の合間におこなっていた。シルム大会で際立った成績は残していないが、レスリングの試合については、いくつかの伝説を持っている。現在、州体育運動委員会シルム協会会長。シルム大会などでは審判を務める。

<04>

a : 1941年生れ

b : レスリング

c : 1948年

d : レスリングの選手として活躍するが、1959年に兄弟で自治州大会に出場し本人は準優勝。1960年にも延吉市の大会に出場し、同じく準優勝する。引退後は、レスリングならびにシルムの指導にあたる。1980年代からは、州体育運動委員会シルム協会の委員として、試合時には審判の任にあたっている。

<05>

a : 1946年生れ

b : シルム

c : 1965年

d : シルムの選手として活躍してきた。これまでの大会成績は、1971年の州大会 5 位、1975年の州大会 2 位。この他に市レベルの大会などを含めると 2 位が 3 回、3 位が 1 回と常に上位に食い込む実力を持っていた。シルム指導者としての実績もある。現在は州体育運動委員会シルム協会委員として試合時には審判の任にあたっている。

<06>

a : 1953年生れ

b : 柔道

c : 1972年

d : 柔道の指導者として琿春市体育学校に勤務する。74年に市の運動会で優勝したが、その後、シルムの大会には出場していない。この間、柔道の選手として活躍する。87年から再び大会に参加するようになった。大会成績としては、1933年延辺韓国振興杯優勝。同じく93年の吉林省第1回少数民族伝統体育運動会優勝。常に、上位に食い込むだけの実力を持つ。

<07>

a : 1957年

b : レスリング

c : 1970年頃

d : 吉林省レスリングチームに9年ほど所属し、その後、延吉市体育学校のレスリング教師として勤務する(93年からは貿易会社に転職)。シルムの大会には78年に開催された体重別大会で第3位となった。現在はシルム大会で審判やコーチとして活躍する。

<08>

a : 1958

b : シルム

c : 中学校時代

d : 短い期間ではあるが、吉林省レスリングチームに所属していた。選手としては83年に開催された吉林省朝鮮族体育運動会で優勝している。また州大会でも優勝経験がある。90年頃からは審判として大会の運営に携わっている。

<09>

a : 1960年生れ

b : レスリング

c : 1978年

d : レスリング選手としても有名であり、1983年に上海で開催された全中国レスリング大会74キログラム級で優勝している。吉林省レスリングチームに10年在籍するが、膝の怪我のため選手生命も断たれ、その後延吉市の体育学校でレスリングの指導者として勤務することになる。パ・シルムに限らず、試合経験は豊富で、代表的なものとしては、第4回全国少数民族伝統体育運動会で格(イ族式相撲)に出場し優勝。パ・シルムにおいても常に優勝候補にあげられ、最近の大会では89年に開催された中国第1回朝鮮族運動会で優勝。92年には延辺朝鮮族自治州成立40周年記念大会で優勝という輝かしい成績を持つ。

<10>

a : 1960年生れ

b : シルム

c : 小学校入学前から(文化大革命以前だったので65年頃から)

d : 77年頃から84年まで大会に出場した。多彩な「わざ」を使い、現在シルムを知る人達の中でもその技術の多さはだれもが認めている。78年には市の大会で優勝している。州大会でも何度か入賞をはたしている。

<11>

a : 1963年生れ

b : レスリング

c : 1981年

d: レスリング選手として吉林省レスリングチームに6年間在籍した。シルムの大会には81年に初めて出場し第3位となる。その後の大会では常に上位に輝く。89年中国第一回朝鮮族運動会・第2位。92年延辺朝鮮族自治州成立40周年記念大会・第3位など。また第4回全国少数民族伝統体育運動会の格に出場し、第2位となる。大きな大会での優勝経験はまだない。

<12>

a: 1967年生まれ

b: レスリング・ボクシング

c: 1986年

d: 87年に初めて大会に出場する。89年の県レベルの大会で優勝している。90年の大会では第3位、また93年の吉林省第1回少数民族伝統体育運動会では第2位の成績を修めている。もとはレスリング選手であったが、91年に延辺ボクシングチームに入団し、現在はボクシングの選手でもある。

<13>

a: 1972年生れ

b: レスリング

c: 1981年

d: 延吉市体育学校でレスリングを学ぶ。その後1年間、吉林省レスリングチームに在籍する。成績としては、90年の朝鮮族運動会で第4位。93年の市の大会で3位などであり、まだ若い選手であることから、今後の活躍が期待されている。

以上のように、シルム選手の約半数以上が、レスリングとの関係を持っていることに注目しておきたい。これは後に検討するわざの習得とも関係が深いからである。

3. 「わざ」の認知

1) 選手達の「わざ」の分類

シルム選手がおこなう「わざ」の分類については、調査表を使用した。なお、インフォーマント番号07, 10については、実際に演じてもらい、それらの技術名を集録した後に、それを体系的に分類してもらった。したがって、この分類に関しては、両者の合作といわねばならない。

さて、調査表の回答の前に、次のようなコメントを口頭で説明し、その後、回答してもらった。

た。

1. 体系的に認識しているものについては、その概念を明確にしてもらう。
2. 自分が「できる」「できない」に関係なく、知っている「わざ」の名称をすべて記述してもらう。

以上のような説明の後に回答してもらったが、調査表記入の年月日については、次の通りである。

1993年8月19日……<01>

1993年8月25日……<07><10>

1993年8月27日……<02><03><05><06>

1993年8月28日……<08><09><11>

1993年9月4日……<04><12><13>

なお面接調査は、基本的に1日ないしは2日後にビデオを見せながらおこない、主として、調査表に記述された内容について質問した。

その結果、以下のような回答が得られた⁴⁴⁾。

<01>

배재기

안걸이

안손치기

<02>

1. 안손치기 바깥치기

2. 걸이. 안걸이. 바깥걸이

3. 대티치기.

4. 배재기

5. 궁더치기

<03>

손기술: ① 앞무릎치기

② 뒷무릎치기

③ 오금당기기

④ 선손안손치기

1. 십리부치

2. 궁더치기

3. 대티치기

허리기술: ① 배재기

② 들배지기

③ 엉덩배지기

발기술: ① 안다리걸기

② 호미걸이

③ 덧걸이

④ 낚시걸이

<04>

조선족씨름. 공격기술

一. 上半身动作 기술

1. 배제기기술

가. 정면배제기 (두무릎. 모으면서)

나. 왼쪽배제기

다. 左, 右 배제기

그. 안손동작 (动作손동작)

가. 일어서면서 안손치기

나. 선안손 (서서 对方的·中心을 잃을 때 갑자기 나의 오른손으로 对方的 오른무릎을 치면서 이때 나의 오른 다리는 뒤로 물러 가면서)

다. 나의 오른 손으로 对方的 원무릎을 시작미 신호와 같이 갑자기 밀고 매친다.

근. 안장치기 (앉아있을 때 对方的 中心을 잃을 때)

二. 허리 动作 기술 (궁둥제비)

가. 왼쪽 삼바를 들고 나의 엉덩이가 대방의 아래배에 부치면서

나. 삼바를 직고 (对方的 나의 体力보다 더 셀 때)

三. 다리动作기술

가. 안걸이

나. 발목걸이

다. 덧걸이

근. 호미걸이

다. 낚시걸이

련속动作기술

가. 안손을 치면서 궁둥제비

나. 안걸이 건다음 오른 다리 빼면서 덧걸이

<05>

손기술: ① 앞무릎치기

② 뒷무릎치기

③ 오금당기기

1. 심리부치

2. 궁더치기

3. 대티치기

4. 좌우궁더치기

허리기술: ① 배제기

② 든배제기

③ 엉덩배제기

④ 좌우배제기

발기술: ① 안달리걸기

② 호미걸이

③ 덧걸이

④ 낚시걸이

<06>

기술: 배제기 안걸이

바깥다리치기 굽치기

대티치기 옥거리

<07> <10>

一. 배제기

1. 정면배제기

2. 배제기점대티치기

3. 측면배제기 정면배제기

二. 손치기

(-)

1. 앉은굽치기

2. 앉은 자세에서 오른손으로 대방의 원다리 외측을 치면서 몸빼기

3. 앉은 자세에서 왼쪽무릎 당기기

4. (앉아 오른무릎 당기기)

5. 머리로 대방의 머리를 밀며, 오른손으로 대방의 왼쪽 무릎을 들어쥘과 동시에 왼손으로 대방의 오른 발목치기 (머리. 무릎. 발목)

(二) 선안손치기.

1. 한발을 디에 놓고, 어깨를 빼면서 안손치기

2. 선자리에서 정면굽치기

3. 다리사이에 손을 넣어들면서 돌가치기.

4. 오른손으로 대방의 무릎옆에 대고밀기.

5. 오른손으로 대방의 오른쪽 무릎에 대고 몸돌리기.

三 걸이

1. 안걸이: ① 걸고 밀기.

② 안걸이 하면서 밀다가 디로 돌리기.

2. 낚시 걸이

3. 호미 걸이

4. 덧걸이

四. 대티치기

1. 가짜걸이에 대티치기

2. 오른 발로 대방의 발을 치며 몸을 빼

면서 대티치기

3. 얹은 대티치기

五. 궁둥치기 (궁디치기)

1. 궁디치기에 무릎을 치기

六. 다리잡기

1. 다리잡고 돌다가 누르기

2. 다리 잡고 돌다가 오른손으로 대방의 다리 당기기

3. 다리 잡고 돌다가 안손치기

4. 다리 잡고 돌다가 안걸이

5. 다리 잡고 밀며 어깨로 대방의 신다리 (허박다리) 누르기

七. 삽바를 떨궜을 때 쓰는 鎖別子

<08>

기술: 배지기 엉덩이치기

안걸이 들배지기

무릎치기 호미걸이

덧걸이

<09>

얹은기술: ① 얹은 정면굽치기

② 얹은 박앗다리치기

③ 오금 당기기

④ 얹은 박앗안손치기

궁둥치기: 앞다리 들어가면서 궁둥치기 덕다리 들어가며 궁둥치기 궁둥치기하면서 앞발목걸이

허리기술: ① 정면배지기

② 측면배지기

③ 엉덩배지기

④ 측면 배지기것달 리치기 (손으로 치기)

발기술: ① 안다리걸기

② 호미걸이

③ 덧걸이

④ 낙씨걸이

⑤ 손목지고 발목치기

<11>

기술: 엉덩이치기 배지기

안걸이 들배치기

무릎치기 호미걸이

덧걸이 다리잡기

<12>

안 소

배 들 기

엉치치기

<13>

얹은안소: 1. 것다리치기

2. 手別子

③ 얹은 안소로 덕로 걸기

서서동작: 1. 배들이

1-1. 배들이해서 궁디치기

1-2. 배들이 해서 원다리걸기

2. 궁디치기

3. 안걸이

4. 덧걸이

5. 낙씨걸이

6. 서서안소

7. 서서手別子

8. 걸이 걸면서 두다리치기。

ここに示された分類には、大きく2つの傾向を見て取ることができる。一つは、03, 05, 09, の分類に見られるように、身体の部位を基準として分類する方法で、そのわざを成功させるために使われる最も重要な身体部位を取り上げる方法である。これに対して、わざの類似性を中心として、同一の運動形態をひとまとまりにして、そこで体系化していくという方法は04, 07, 10, 12に見られる。

2) 「わざ」名称に関する若干の歴史的変遷

さて、以上の結果とインフォーマントの説明から、ここに示された2系統の「わざ」の分類には、若干の歴史的な変化を見て取ることができそうである。そこでこれらの歴史的経緯についてその変化をみていくことにしよう。

最初に注目しておきたいのは、01の分類である。ここでの分類は、それぞれ異なる技術を3つほどあげており、その下位区分は示されていない。01によれば、彼が選手であった戦後まもなくの頃は、「わざといっても、今のように複雑化しておらず、簡単な技術であった」という。そして、インフォーマント01と年齢の近い02の分類によれば、それまであった技術にいくつかの技術が加えられているにすぎず、体系化されていないことがわかる。ところが、03にいたっ

ては、これが若干細分化される。つまり、手の技術、腰の技術、足の技術という概念が導入される。このような分類体系は、基本的に05までほぼ変わることはない。04において若干分類が異なっているが、基本的なスタンスは同じとみて良いであろう。

ところが、にわかに07、更には10以降になると明らかに、分類方法に変化が見えてくる。わざも多彩になってくると共に、その分類方法が、手や足などの身体部位を基準にするのではなく、まさに技術が細分化していくという傾向が見られるのである。ただし、07、10が示した技術名称については、細分化されるに従い説明的となり、わざに対応する名称が、本来、存在していないことを伺わせている。

09については、身体部位の分類と技術名称からの分類との両方が混在しており、まさに2系統の分類の狭間にいることを感じさせる。

ただし06、08、12に関しては「わざ」の名称のみを記述しているに留まり、技術の体系化は意識されていない。これは06の場合には、すでにシルムの技術を身に付ける前に、柔道の技術をマスターしており、この技術が実際の試合場面ではいかされていることとも関係しているのではないかと考えられる。つまり、柔道のわざに対応させてシルムの技術を身に付けた結果、シルムの技術を身に付ける段階で、少なくとも体系的に学ばなかったということであり、彼の指導者が考えていた分類がそのまま投影されていないと見ることもできるのである。また08については、技術を体系的には学習してこなかったと見ることもできる。この点については、技術習得の方法の問題であるので、後で検討することにする。12については、シルムの経験が浅いことが原因していると考えられる。

また、11についても技術名を列挙しているに留まっているが、1992年8月13、14日の調査時に彼は次のような体系を示している⁴⁹。

- 一. 배제기
- 二. 걸 이
1. 안걸이

2. 덕걸이
3. 낚시걸이
- 三. 손치기
- (一) 앉은자세에서 5가지동작
1. 굽치기
2. 덧손치기에 안걸이 접한동작
3. 앉은자세에서 손치기
4. 덧손치기
5. 앉은자세에서 일어서는 순간에 안걸이.
- (二) 선자세에서 안손치기
- 四. 궁디치기
- 五. 테티치기
- 六. 밀다리치기 (테티치기와 방향을 바꾸다)
- 七. 다리잡기
- 八. 자기삼바를 리용하여 배제기들을쓰는 경우
- 九. 삼바가 떨어지는 경우에 삼바를리용하여 쓰는 경우

この場合、どちらを優先させるかという問題も出てくるが、明らかなことは、今回の調査よりも1年前におこなった調査の結果において技術の体系化が試みられているということである。つまり、本質的には技術の体系化をしているということなのであろう。しかし、それは常に意識されることがないのではないか。というのも、このように分類の仕方が変化するということは、つねにこの分類基準が変わっていると考えられ、技術の体系化は基本的には、おこなわれていないとも読めるからである。そして、このようなことが、全体的に共通することなのか、それとも個人レベルでのことなのかについては、まだ明らかになっていないのである。

若い選手である13の分類を見ても、やはりある程度の体系化がおこなわれている。しかし、わざの名称はそれ程豊富ではないことから、「わざ」そのものを知らないのかというところではなく、面接の結果、わざは知っていても、それを言語として表現できないということのようである。

以上の結果から、時間が経過するにつれて、わざの認識が変化していることは読み取ること

ができる。そこで、この結果を整理すると次のような傾向を指摘することができる。すなわち、戦前から戦後しばらくの間は、わざに名称をつけていくといったことがおこなわれず技術を分類するという認識は希薄であった。しかし50年代に入ってから、レスリングを行ってきた人々の間で身体部位を基準とする分類の認識が生まれた。そして、70年代に入ると豊富になってきた「わざ」を運動形態の類似性という概念の中で体系化するという試みがなされてきたのである。

このように「わざ」が体系化してきた背景には、一つに個々の動きに対して個別の名称を付すということが行われるようになってきたこと。二つめに新しい技術が開発されたこと。三つめとしてレスリングなどで行っている技術分類の概念が導入された可能性があることなどが考えられる。

3) 技術名称の言語的特徴

それでは、言語表現から「わざ」の分類がどのようにおこなわれるのか。先に指摘したように70年以降は、運動形態の類似性による分類が出現している。運動形態の似通ったものを一つのグループとする考え方である。一般的に、運動形態の基本が同じであれば、その動きの表現は、類似したものとなりがちである。例えば、柔道などの場合、小内刈り、大外刈り、大内刈り等の技術などは、「刈る」という動作を伴うことが名称によって示されており、ある程度類似した運動形態であることがわかる。このようなことが、パ・シルムの中にも見出せるのではないだろうか。

そこで、最初にこれら運動形態の基本語彙を抽出することにしよう。すべてのインフォーマントに共通している語彙があれば、それに注目すればよいが、必ずしもそうでないことから、数人の間で共通している語彙がある場合には、それを抽出する。すると以下のような名称が浮上してくる。

1. 배재기
2. 손치기

3. 걸이
4. 대티치기
5. 궁둥치기

そこで、次にこの基本語彙の下位の категорияとなる「わざ」を洗い出すことにしたい。本来なら、運動形態とあわせて記述する必要があるはずだが、言語表現と運動形態の両方を比較させる方法が見つからないので、ここでは面接調査での説明を参考にしながら体系化することにした。ただし、下位の category が存在するのは、1, 2, 3 であり、特に2, 3の上位の category は直接の運動技術を示す用語ではないことから、ここで確めされる技術が基になる技術ということになる。

1. 배재기
 - (1) 정면배재기
 - (2) 측면배재기
2. 손치기
 - (1) 얹은굽치기
 - (2) 선안손치기
3. 걸이
 - (1) 안걸이
 - (2) 낚시걸이
 - (3) 덧걸이
 - (4) 호미걸이

以上のことから、基本語彙となっている運動技術は、言語レベルにおいて基本技術と考えることができる。ただし、2, 3については運動技術を包括する用語であり、下位の category が基本技術と考えてよいであろう。1については、その下位の category となる技術が応用技術と位置づけられそうである。

最後に、基本的な技術名称についても若干の検討をしておこう。運動技術の名称の中で核となっている言葉の、例えば호미걸이의호미は鋏のようなものを意味し、낚시걸이의낚시는釣り針を意味している。これらの用語は農具との関係を伺わせるものである。리윤철[1958:29]が指摘するようにシルムが農村社会と関係を持っているとするなら、基本的な技術名称の中に農村との関係を示す用語が使用されていたとして

も不思議ではない。シルム自体が本来は庶民の中で発展してきたものであることからすると当然といえるのかもしれない。そう考えると運動形態の名称の付け方には、農村社会の影響が部分的であれ反映していたことになるのである。

4. 師弟関係と「わざ」の習得

1) 技術習得の方法

技術ならびに技術名称の認識は、その学習方法と無縁ではない。どのように学ぶのかによって、弟子達の中で技術の体系化がなされるからである。そこで、技術習得の方法を見ていくと、まず師匠を探し、その師匠について基本となる技術を習得していく。どの技術から習得していくかについては、師匠の考え方にもよるが、最初は걸이系のわざ、次に손치기系のわざ、そして最後に뽕채기系のわざというのがインフォーマントたちの共通した見解である。ここには技術習得のための難易度が考えられている。教える対象がある程度の運動経験を持っている場合には、指導者の得意わざを最初に教えることが多いとインフォーマントたちは言う。つまり、初心者には基本となる技術を最初に習得させ、次に、その応用技術を教える。それをマスターすると次の基本技術に移るわけである。ここに運動技術の分類が見られるのである。つまり、ここでの分類は、先に示した言語的な分類がその根幹にあり、この分類に沿って指導されるのである。

次に分類以外の特徴についても触れておこう。まず、一つは、技術習得までの時間が短いということである。これは、先にも見たように技術の絶対数が少ないことに原因している。この理由としては、サップの関係から、すべての技術が左から仕掛けることになり、そのため、運動技術のバリエーションが制限されるという特徴を持っているのである。例えば韓国のシルムの場合には、左右のわざがそれぞれ存在することから、そのわざの数はパ・シルムの10倍近くにも及んでいる。

また、韓国シルムに比べてパ・シルムの練習

時間はそれ程長くない。というのも、パ・シルムは右シルムに比べると、身体的な負担が大きく、長時間練習することは、困難であるという。しかし、昔の選手達の話では、「腕の皮がむけても練習した」と語っており、現在の選手達の練習態度とは異なっていたことを伺わせる。

二つめの特徴として、技術習得の師の選び方にも特徴がある。前述したように、最初に基本的な技術を習得する時には、一人の師について学ぶが、しかし、その技術の習得は、早ければ数週間の後に終わってしまう。そして、そこで技術を習得した者は、試合に出場することになるが、試合場で自分が習得したいと思う技術を使いこなす選手に巡り合うと、その後、その選手に弟子入りして技術を学ぶということがおこなわれる。つまり、師となる人の得意わざを身に付けようと言うのである。この場合、最初にその技術を繰り返しおこない、2日目頃からは、試合形式でその技術を定着させていくという方法が取られる。そして1週間程通うと、試合時において、その技術がつかえるようになるという。昔は、ことあるごとに、技術を習得するために弟子入りしたようである。

このような技術の習得方法は、新しく身に付ける技術が、ともすると基本技術の中のどのレベルに位置づくのかという判断を狂わせることになる。これは、シルムの技術の習得に際して、技術名称と運動技術を常に対応させてこなかったこととも関係がある。インフォーマントたちの話るところによれば、運動技術は教えてもらったが、その名称もあわせて教えてもらうことはなかったと言う。つまり、運動技術を習得した後に、技術名称を知識として身に付け、両者を対応させるといったことが現実には起こっているのである。しかし、基本的な運動技術に関しては、誰もが口をそろえて最初の師匠から教えを受けたと語っている。

2) 師弟関係

そこで、シルムの基本技術とその名称の習得は、教えを受ける師匠の認知レベルと何等かの関係を持っているようにも考えられる。前述し

たように、運動技術は、最初に学ぶ師匠によってその認知レベルの骨格が作り上げられていく。

そこで、最初に師匠と弟子の関係が、現在までどのように変化してきたのかについて触れておこう。戦前から戦後にかけては、弟子入りしたい者が、師匠となる者にお願いして、弟子入りする。弟子入りに際しては、特に師弟の契りをかわすことはなく、普通、弟子入りした当日から練習に入るのである。

しかし、このような古典的方法は、80年代になって崩れてきたようである。それは、この地にある业余体育学校（市体育学校）の存在とも大きな関りがでてきているようである。体育学校でレスリングを教える指導者達は、実は優秀なシルム選手でもある。シルムを一人の指導者について学ぶよりも、このような学校に入り、そこで複数の良き指導者についてレスリングを学びながら、あわせてシルムも教えてもらうという方が将来的な面からも有利であると考えら

れるようになったからである。というのもスポーツとつながりを持ちながら生計を立ていこうと考えた場合には、シルムの選手であるだけではその道は開かれず、いわゆる近代スポーツとの関係を保つことが最低限必要だからである。つまり、レスリング選手になるということなのである。また、70年代終盤からの政策である経済開放は、それまで残っていた師弟関係のあり方をも大きく変化させ、個人による指導は極端に減少した。経済中心の社会となり、指導者となるべく人々が、延辺から離れたたり、シルムとの関係を絶ってしまったことなどが原因のようである。

したがって、学校中心のシステムが、個人指導に取って代わらなければならなかったともいえる。そこで、13人のインフォーマントの師弟関係をシルムとレスリングの両面から図式化してみよう（図1）。矢印の方向は伝達経路を示している。また、年代は、シルムを始めた年に合せてプロットした。

これを見ると、レスリングのつながりによる師弟関係が網羅的に広がっておりみられ、この関係が実はシルムの伝承に大きく関わっていたことが指摘できるのである。

おわりに

これまで見てきたように、中国朝鮮族のパ・シルムの運動技術は、戦後、レスリングの師弟関係を軸に伝承されてきたと考えられる。伝承の方法としては、言語レベルに基づく、分類を背景としながら一つの基本運動技術を習得させた後に、応用の運動技術を習得させるという方法が取られた。

このような習得方法は、シルムと最初に関わりを持つ際にみられ、どうもこの方法が運動形態と技術名称を一致させていたのである。そして、技術の体系化はこれらの基本的技術を習得した時点で試みられたようである。つまり、運動技術の認知は、言語を核としておこなわれていたことになる。そして、その核となる運動技術の名称の一部分は、農村社会の影響を反映し

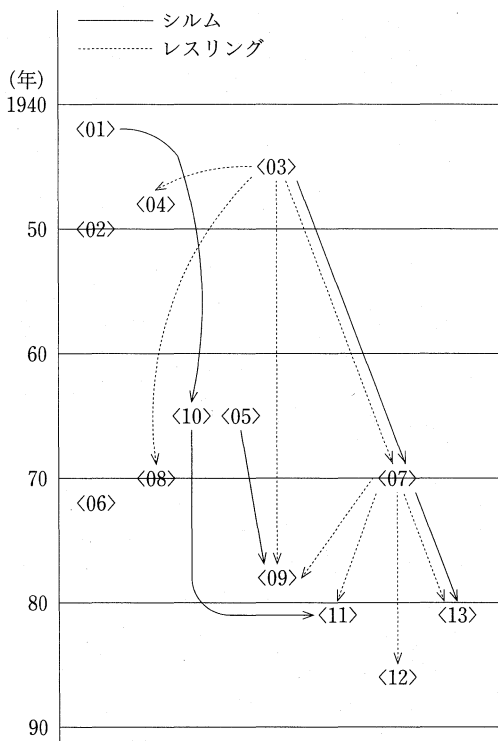


図1 パ・シルムとレスリングの師弟関係図

たものであった。さらに技術名称の歴史的変化からみると、パ・シルムを最初に学ぶにあたっての師匠の分類基準が大枠を形成していったが、技術の認知が細分化されることによって、その枠組みが変化をを起こしてきたととらえられるのである。つまり、最初是个々の技術名称だけの羅列であったものが、身体を基準とする分類概念が組み込まれ、最後には、運動形態とそれを表現する言語の組み合わせの中で運動技術の認知の枠組みが形成されたと考えられるわけである。

しかし、ここに示したモデルは、そのすべてが今回の研究で検証されたわけではない。したがって、今後の研究によって、モデルの修正も含めて十分に検討を進めたいと考えている。

注記

- (1) 民族スポーツの用語が一般的に使用されるようになるのは、日本体育学会においてスポーツ人類専門分科会の設置が認められた1987年前後のことである。
- (2) スポーツを対象とした文化人類学研究の歴史については、寒川〔1944:3-8〕の「スポーツ人類学の研究史」を参照されたい。
- (3) 身体活動を問題とした場合には、モース〔1976〕によって提示され川田〔1988 a b, 1990, 1992など〕によって展開されている身体技法からのアプローチが当然考えられるし、これとは若干異なる視点からアプローチとして菅原〔1993〕の方法も有効であるように思われる。

しかし、本稿では、これらとは若干異なる立場からのアプローチを試みようとしている。考え方の大前提として、身体活動は知識の表現体であるとしてとらえている。つまり、スポーツ場面における個々の活動はある種の知識が背景にあり、常にその知識に基づいて行動しているという考え方である。しかし、これだけだと身体技法が意図する視点と何等変りがないことになる。そこで身体活動が言語化されているのかという点に注目した。もちろんここでの身体活動とは、スポーツを意味しているわけであるから、当然、スポーツを表現する言語の構造と実際の動きとの関係を見ていくことが重要になる。

- (4) ここの説明とは、必ずしも一致しないが、スポーツ社会学においてこれまでルールや技術といったことが、社会との関りの中で検討されてきている。

- (5) 生田〔1987〕は日本の伝統芸道を取り上げ、その伝承における認知過程を明らかにしている。

- (6) 運動そのものが記述されることは希なので、基本的には文献資料に頼ることは、そのような意味でも難しいのが現状といえよう。

- (7) 朝鮮族のシルムに関する著書をその内容から分類すると次のようになる。

1) 朝鮮族のための学習指導要領

『小学課本（試用本）体育 5年級用』

『小学課本（試用本）体育 6年級用』

『中学課本（試用本）体育 1年級用』

『中学課本（試用本）体育 2年級用』

『中学課本（試用本）体育 3年級用』

2) 指導のための手引書

『中等師範学校課本（試用本）中等師範学校民族体育教材』

『朝鮮族民族運動』

3) パ・シルムの試合規則

『朝鮮族摔跤，秋千，跳板比 規則』

4) 民族スポーツの概説書

『民俗体育集錦』

『民俗體育集錦』

『中華民族伝統高育志』

『中国大百科全書』

この中の1)から3)までが延辺に居住する朝鮮族の手によって著されたものであり、4)が朝鮮族以外の民族によって記述されている。また1)から3)において運動技術についての記述がなされているが、それがすべて一致しているわけではない。

- (8) 運動の形態そのものが異なっており、それはルールなどからも読み取ることができる〔宇佐美1995〕。

- (9) 延辺朝鮮自治州の概況については、自治州30周年を記念して出版された『中国の朝鮮族』〔延辺朝鮮族自治州概況執筆班（大村益夫訳）1987〕に詳細が示されている。

- (10) シルムの運動形態についての分類は、これまでいくつかの知見が出されているが、それらをまとめると2つの考え方に集約される。一つは、パ・シルムを除く3種類の運動形態に分類する方法。

もう一つがパ・シルムを入れて4種類に分類する方法である。3種類の分類方法は、明らかにパ・シルムを見落としていた可能性が高いことから、ここでは4種類の分類方法を採用することにした。

- ⑪ 延辺のシルム選手達の語るところによれば、彼らのおこなっているシルムは「サップ・シルム (살바씨름)」であるが、文字表記する場合には、慣例として「パ・シルム」の表記を用いてきたという。なお、彼らは南北朝鮮でおこなわれているシルムを「パルン・シルム (바른씨름)」と呼んでいる。
- ⑫ 北朝鮮の出版物で現在確認できた範囲においては、シルムの運動形態別の記述は一件しか見当たらない。その中の記述を見ると、これが出版された1958年には、すでに右シルムが統一された形であると説明されている [라 1958]。
- ⑬ 1993年の調査は、東洋大学の海外研究補助金によっておこなわれたものである。
- ⑭ この辺の事情に関しては『satya 9』に報告した [宇佐美 1993a:11]。
- ⑮ わざの名称の前に付されている番号は、調査表のままにしてある。
- ⑯ この体系の分析については、すでに「中国朝鮮族の民族相撲 (シルム) の構造」の中で試みている [宇佐美 1993b:173-189]。
- ⑰ ここでの問題点は、わざの名称が意味する身体の動きをどのように定義するのかということである。動きとその表現が一致して、はじめて体系化が可能となるはずである。今回は、このような問題点をクリアすることができなかったため、面接調査での回答において、同一の運動形態であると筆者が認めたものを一つのグループとすることにした。

引用・参考文献

- 崔常壽 1988『韓國의 씨름과 그네의研究』亞人閣 (韓国:ソウル)
- 張文西「中国式摔跤」『中国大百科全書 (体育)』中国大百科全書 pp.536-537. (中国:北京)
- 中国体育博物館, 国家体委文史委員会 1990『中華民族傳統體育志』広西民族出版社 pp.151-152. (中国:広西)
- 朝鮮族中小学校体育教材編写組編 1991『小学課本 (試用本) 体育 5年級用』東北朝鮮民族教育出版社 (中国:延辺)
- 朝鮮族中小学校体育教材編写組編 1992『小学課本 (試用本) 体育 6年級用』東北朝鮮民族教育出版社 (中国:延辺)
- 朝鮮族中小学校体育教材編写組編 1988『中学課本 (試用本) 体育 1年級用』延辺教育出版社 (中国:延辺)
- 朝鮮族中小学校体育教材編写組編 1989『中学課本 (試用本) 体育 2年級用』東北朝鮮民族教育出版社 (中国:延辺)
- 朝鮮族中小学校体育教材編写組編 1991『中学課本 (試用本) 体育 3年級用』東北朝鮮民族教育出版社 (中国:延辺)
- 福井勝義 1991『認識と文化』東京大学出版会
- 長谷川明 1993『相撲の誕生』新潮社
- 胡小明 1989『民俗體育集錦』四川民族出版社 pp.39-40. (中国:四川)
- 生田久美子 1987『「わざ」から知る』東京大学出版会
- 일양약품씨름연구소 1991『씨름교본』일양약품씨름연구소 (韓国:ソウル)
- 川田順造 1992「身体技法の技術的側面」『西の風・南の風』河出書房新社 pp.64-122.
- KAWADA, Junzo 1988(a) “La Boucle du Niger de point de vue de la culture matérielle”, in Boucle du Niger: approches multidisciplinaires, volume1, publié sous la direction de Kawada Junzo, Tokyo, Institut de Recherches sur les Langues et Cultures d'Asie et d'Afrique: 11-82.
- KAWADA, Junzo 1988(b) “Les techniques du corps et la technologie traditionnelle: remarques préliminaires”, in Boucle du Niger: approches multidisciplinaires, volume1, publié sous la direction de Kawada Junzo, Tokyo, Institut de Recherches sur les Langues et Cultures d'Asie et d'Afrique: 83-96.
- KAWADA, Junzo 1990 “Techniques du corps dans la technologie traditionnelle”, in Boucle du Niger: approches multidisciplinaires, volume 2, publié sous la direction de Kawada Junzo, Tokyo, Institut de Recherches sur les Langues et Cultures d'Asie et d'Afrique: 111-180.
- (上記以外にも volume 3 (1992), volume 4 (1994) において身体技法の問題が取り上げられている)

パ・シルムにおける「わざ」の認知と分類

- 金正禄 1992 『씨름교본』 서림문화사 (韓国：ソウル)
- 松井健 1983 『自然認識の人類学』 どうぶつ社
- 松井健 1991 『認識人類学論攷』 昭和堂
- M・モース (有地・山口共訳) 『社会学と人類学Ⅱ』 弘文堂
- 民族体育集錦編写組 1985 『民族体育集錦』 人民体育出版社 p. 52. (中国：北京)
- 寒川恒夫 1994 「スポーツ人類学の研究史」, 寒川恒夫編著 『スポーツ文化論』 杏林書院
- 菅原和孝 1993 『身体の人類学』 河出書房新社
- 東北三省朝鮮族師範学校体育教材編写組編 1986 『中等師範学校課本 (試用本) 中等師範学校民俗体育教材』 延辺教育出版社 pp. 1-25. (中国：延辺)
- 宇佐美隆憲 1993 a 「スポーツ人類学のフィールドワーク」 『satya』 9 東洋大学井上円了記念学術センター
- 宇佐美隆憲 1993 b 「中国朝鮮族の民族相撲 (シルム) の構造—ルールと技術の体系を中心に」 『白山人類学』 2 白山人類学研究会
- 宇佐美隆憲 1995 「中国朝鮮族シルムの持続と変容」 『すもうの人類学』 大修館書店 (出版予定)
- 尹鶴柱 閔永淑 編著 1984 『朝鮮族民俗運動』 遼寧人民出版社 pp. 1-54. (中国：遼寧)
- 延辺朝鮮族自治州概況執筆班 (大村益夫訳) 1987 『中国の朝鮮族』 むくげの会刊
- 라운출 1958 『조선의씨름』 국립출판사 (北朝鮮：ピョンヤン)